

『甘いのはキライ』

著：真崎ひかる

ill：明神 翼

予期せず、この公園で顔を合せたのは、五日前か.....。

そう思いながら脇の小道を歩いていた朱音は、何気なくいつも自分が座っているベンチに目を向けて、ピタリと足を止めた。

「あ.....れ」

薄暗い、静かな公園のベンチに人影がある。自分以外の人が、この時間にそこに座っていることなどまですらないのに.....？

トクトクと、心臓の鼓動がスピードを速めるのを感じた。

そこにある人影が、誰のものなのか.....確信に近い予感が、朱音の足をその場に縫い留めている。

たった今、深入りしてはいけない.....関わらずにいようと、心に決めただけなのに。

歩道の脇に立って自分を見ている存在に気づいたのか、ベンチに座っていた人影が立ち上がった。

「アカネくんだろ」

大きく右手を振りながら、名前を呼びかけてくる。

公園の周りは高層ビルで、路上を歩く人の姿も今はない。静かな夜の空気は、さほど大きくない男の声をやけに響かせた。

「おーい、アカネくん！」

「聞こえてますっ」

名指しされたからには無視して走り去るわけにもいかず、朱音は短く答えて公園に足を踏み入れた。

戸惑いを押し隠して、篠田がいるベンチの脇に歩み寄る。篠田の背後から風が吹き、バターやバニラの甘い匂いが漂ってきた。

朱音は、眉を顰（ひそ）めそうになったのをなんとか堪え、唇を引き結んだ。

「ここにいたら、また逢えるかな〜.....と思ったら、当たりだった」

「.....なんで？」

どうして自分を待つようなことをしているのかと、小さく尋ねる。

約束もしていないのだから、こんなところにも無駄足になったかもしれないのだ。

朱音がこの時間にここを通りかかったのは、五日振り.....と考えたところで、篠田が言葉を返してきた。

「なんでって、君と、もっと話してみたかったから。逢えてよかった。三度目の正直ってヤツだな」

どうやら、博物館でのシフトが終夜勤務だったり警備の仕事が休みだったりした五日のあいだに、少なくとも二度同じように来ていたらしい。

タイミングがいいのか悪いのか、コンビニのシフトも昼間や夕方だったので、篠田の来店時間からはズレていて.....顔を合せるのも、深夜にここで逢った日の翌朝にコンビニで話しかけられて以来だ。

「座らないか？ 夜遊び帰り.....じゃなさそうだな」

「.....バイト帰り」

ポツリと答えた朱音は、座らないかと促しつつ先にベンチに腰を下ろした篠田を、戸惑いの目で見下ろす。

どうして、座れなどと？

逢えるかどうかもわからないのに、深夜の公園で待つまで話したかった.....なんて、本気だろうか。

「そっか。あっちから歩いてきたってことは、いつものコンビニ.....じゃないよな？」

「博物館の夜間警備」

聞かれたことに短く答えるだけの朱音とは、会話らしい会話が成り立っているとは思えない。それなのに、篠田は楽しそうに笑っている。

「へえ.....少し意外だな。失礼ながら、腕っ節が強そうには見えないけど」

「っ！」

自然な仕草で手を取られて、ビクッと肩を震わせた。

篠田はもともと他人との垣根が低いのか、どうにも距離感が近い。

こんなふうにはスキンシップを図ることが普通なのかどうか、友人らしい友人のいない朱音にはわからない。

振り払っても、たぶん篠田は腹を立てないだろうけど.....そうしていいものか、悩む。

篠田は朱音の葛藤に微塵も気づく様子はなく、

「殴り合いのケンカとか、したことがなさそうなキレイな手だ。警備のバイトなんて、大丈夫か？」

自分の手のひらに朱音の指を伸ばし、薄暗い電灯にかざすようにして指先や手の甲をマジマジと見つめている。

篠田の手のひらはあたたかく、パッと見の印象は優（やさ）男（おとこ）風なのに意外とがっしりと大きくて、落ち着かない気分が加速する。

「別に、窃盗グループや侵入者と闘う……とかじゃないし。異常がないか、建物の中を巡回するだけ。貴金属店や金融機関の警備とかは専門の人がいるから、おれみたいなのには回ってこない」

答えながら指を引こうとしたけれど、少し動かしただけで篠田が朱音の指ごと右手を握った。

「それでも、もし『異常』があれば見逃すってわけにはいかないだろ。安全とは言い難いバイトだなあ」

朱音が逃げたがっていることは気づいていると思うのに、篠田は朱音の指を握り込んだ手にキュッと力を込めてしみじみと零す。

見下ろした篠田は、他意のなさそうな平然とした表情だ。きっと特別な意味はないのだと、トクトク鼓動を速くする自分に言い聞かせる。

「終夜とかだと特に、時給……いいから」

きちんと、普通の調子で答えられているだろうか。抑え切れない動揺が、声に滲み出てしまっていないだろうか。

ドギマギする心を押し隠して、なんとか無表情を保つ朱音の努力など知る由もなく、篠田は顔を上げて目を合わせてきた。

「巡回中心のバイト帰りなら、疲れてるだろ。突っ立ってないで、座れって」

「……………」

無言で頭を上下させた朱音は、逃げる口実を得たとばかりに篠田の手から指を取り戻して、ベンチに座り込む。

こんなふうには、この男の隣に腰を落ち着けるつもりなどなかったのに、と気づいた時には後の祭りだった。

いつの間にか、篠田の思うまま彼のペースに巻き込まれている。

「お疲れ様のアカネくんに、夜食をあげよう」

そう言いながら、見覚えのある焦げ茶色の紙袋を差し出される。朱音が腰かけた場所とは反対側に、置いていたらしい。

「おれ、甘いものは」

「嫌いだ、って憶えてるよ。チーズパイと、……試食だ」

勝手に朱音の膝の上に紙袋を置いた篠田は、折り畳んでいた袋の口を開けて二口サイズの長方形のパイを取り出す。

「カスタードクリームや甘いジャムじゃなくて、甘さを極限まで抑えたレモンカードを使ってる。酸っぱいよ」

ハイ、と。当然のように口元に差し出されて、頬を引き皺らせた。

なんなんだ、この人。野良猫に餌付けをしているつもりか？

「あの、こういうの……困る」

「じゃあ、自分の手でどうぞ」

突きつけていた長方形のパイを、ひょいと裏返された左手のひらに載せられた。朱音の「困る」の意味を、わざと曲解しているのではないだろうか。

食べ物を投げ捨てることなど、できるはずもなく……きつね色に焼けた小さなパイを、ジッと見下ろす。

「またエネルギー切れでダウンするんじゃないかと、心配なんだ。一口だけ齧ってみてよ。ダメなら吐き捨てていい」

「……………」

そう言った篠田は、朱音の手のひらの上で半分に割ったパイの片割れを自分の口に入れる。

無様な姿を見せてしまった夜の記憶は、まだ新しい。

あのことを持ち出されると、突っぱね続けることができなくなってしまい……仕方なく、一口サイズになったパイを口に放り込んだ。

サクッとした軽い食感と、バター風味に続いて、篠田が言ったとおりのレモンの酸味が舌に広がる。確かに、甘いというよりも酸っぱい。

「どうだ？」

「……食べられなく、ない」

ボソボソつぶやいた朱音の捻くれた言葉に、篠田は「そりゃよかった」と笑った。

咀嚼（そ）嚥（しゃく）したパイを嚥（えん）下（げ）した朱音は、舌に漂う爽やかなレモンの余韻を感じながら口を開く。

「篠田さん、変な人って言われませんか。おれを餌付けしてなにが楽しいのか、理解不能なんだけど」

朱音はズケズケと失礼な言い方をしたと思うのに、篠田はやはり機嫌を損ねることなく、微笑を滲ませて首を傾げた。

「変……か？ うーん……アカネくんにはこんなふうにしたことがないから、言われたことはないかな」

「なんで、おれ？」

誰にでも、こうして距離を縮めるのだと思っていた。それが、自分だけだと言われてしまうと……ますます不可解だ。

「なんでだろう。また行き倒れそうになってたら大変だと思うし、甘いものが苦手……を乗り越えて嫌悪している君が、気になるかな」

「気に障る、じゃなくて？」

「じゃ、なくて」

言い換えた朱音の言葉を否定したけれど、実は、篠田自身もよくわかっていないのかもしれない。

「どう言えればいいかなあ」

と、朱音と一緒に首を捻っている。

ダメだ。理由を知るところではない。これでは、謎が深くなる一方だ。

「平気そうなら、持って帰っておやつにして。シュークリームは……」

「イラナイ」

言葉の終わりを待つことなくキツパリ拒絶した朱音に、篠田は「やっぱり？」と苦笑を滲ませる。

「本当は、余らせることなく売り切るのが一番なんだけど……見極めが難しいなあ」

ふう……とため息をついた篠田は、開けていた紙袋の口を折り畳んで朱音の膝に戻した。

朱音はなにも言っていないのに、彼の中では持ち帰らせることが決定しているらしい。

「よく知らないけど、ケーキ屋ってこんなに遅くまでやっているもの？」

ふと、頭に浮かんだ疑問をぶつける。

ケーキ屋……篠田曰くパティスリーは、甘いもの嫌いな朱音には無縁の場所なので、営業時間など知らない。

でも、一般的なパン屋などは午後八時くらいには閉店しているのではないだろうか。こんな、終電間際の深夜まで営業しているというイメージは朱音にはない。

「ああ、勤め先のパティスリーは七時で閉めてるよ。俺は、その後……八時から十二時まで、別のところへ移動して販売しているから。駅の改札横で、焼き立てミニクロワッサンとかメロンパン、量り売りしているの知ってる？」

「……知らない」

徒歩圏内で生活している朱音は滅多に駅を使うことなどほとんどないし、通りかかっても素通りするに違いない。

焼き立てクロワッサンとかメロンパン……その周辺に漂うであろう甘い匂いを想像するだけで、失礼ながらなんとなく気分が悪くなる。

「小さい店舗なんだけど、その店が閉店した後に間借りしているんだ。ミニシュークリームやパイとかの焼き菓子。どれでも選り取り五つで、三百円」

そう言った篠田は、朱音の膝の上にある紙袋を指差して、

「売り切るのは難しいんだけどね。休業中」

と、嘆息する。

篠田が甘い匂いを纏っている理由が、それでわかった。狭い空間でパイや焼き菓子を作っているのなら、服とか髪に染みついても仕方がない。

「甘いもの、全然ダメなのか？ 和菓子も？」

「和菓子は……食べることないから、よくわかんないけど。チョコとか、絶対に食べたくない。菓子パンもイヤだ」

「うーん……そっかあ」

朱音の返答に篠田があまりにも残念そうにつぶやくから、つい言うつもりのなかったことを口にした。

「……だけ」

「え？ 悪い、聞き取れなかった。もう一回」

「ホットケーキなら……たぶん、平気。ゴテゴテとクリームが盛られているのじゃなくて、バターと蜂蜜だけのやつ」

昨今の流行らしく、山盛りのクリームやフルーツで飾りつけられた『パンケーキ』が表紙写真に使われている雑誌が多いので、朱音も存在を知っている。

でも、朱音が口にできるものはシンプルな『ホットケーキ』だ。

「そうか。ホットケーキ、ね。今度、作ってこよう」

「いいよっ、わざわざそんなの……。食べたかったら、コンビニでも買えるし」

パンコーナーにあるビニールパッケージのホットケーキは、朱音が辛うじて口にできる甘味に分類されるものだ。

ただ、一度試しに食べてみて、記憶にある『ホットケーキ』とのあまりの違いに落胆して以来、一度も

手に取ったことがない。

そこまで詳しく篠田に説明する気はないので、話を終わらせた……つもりだった。

「コンビニでも買えるだろうけど、ホットケーキは焼き立てが一番だろ」

それなのに篠田は、更に突っ込んで聞いてくる。

記憶の中にある、焼きたてのホットケーキを思い浮かべて小さくうなずいた。歪な形で、端の方が焦げていて……でも、美味しかった。

自作することはないので長く口にしていなくても、焼き立てが一番だという言葉には同意だ。

「……たぶん」

「だよな。よし、やっぱり今度食べさせてあげよう。アカネくんに甘いものを食わせて、美味いって言わせたい」

もしかして自分は、菓子職人のプライドというか闘争心のようなものに、火を点けてしまったのだろうか。

グッと拳を握って気合いを入れている篠田を横目で見遣って、思っても見なかった方向に向かった事態の收拾をどうつけばいいのか、思案する。

「おっと、こんな時間だ。家まで送って」

「くれなくていい。近いし」

無愛想に篠田の言葉を遮った朱音は、膝に置かれている紙袋を掴んで勢いよくベンチから立ち上がる。

ゆっくり腰を上げた篠田は、朱音に肩を並べて「残念」とつぶやいた。

「明日は、朝……コンビニにいる？」

「うん」

「じゃ、出勤前に寄ることにしよう」

さり気ない一言に、トクンと心臓が大きく脈打つ。

朱音がいるなら、コンビニに寄る。そんなふうになんか告げる篠田は、なにを考えているのだろう。

どう聞き返せばいいのか言葉を思いつかなくて、足元に視線を落とした。

「気をつけて帰るんだよ。……おやすみ」

「これ……ありがと」

おやすみなさい、という一言はなんとなく親しげな響きで、くすぐったい。だから、篠田に同じ言葉を返すことはできずに、「じゃあ」とだけ言い残して回れ右をした。

ぎくしゃくと足を動かして、公園を出る。

篠田が朱音の背中を見送っているだろうと思うから、一度も振り向くことはできなかった。

本文61P～74Pより抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>